子供に言ふ

校長　福田鉄雄

学校の近くの雪の浦の砂浜に、今年十三年ぶりにウミガメが産卵をしたというニュースが入った。そう広くはない砂浜に、それでも五ヶ所に産卵して、その全てが孵化し、子ガメたちは、この浜から大海をめざして旅立って行った。まだほんの小さな子ガメたちは、この大海の荒波に翻弄されながらも、小さな手足を懸命にバタつかせながら、目的地へ向かって行くのだろう。本能だからと言えばそれまでだが、彼らの無事を祈りたくもなる。そしてまた、彼らが大人になった産卵の時には、この故郷の浜に返ってきて欲しいと願う。

子供に言ふ

草野天平

子供よ
ここへお坐り
お前はさつき石をもつて喧嘩をしてゐたね
さういふことではいけない
石をお捨て
いつかも一緒に歩いてゐるとき
お父さんがゐるんだぞと言つてゐたことがあつた
自分はああいふ時
本当はお前のそばにゐないのだ
あの子がお前より強ければ
強いやうに打てばいいと思ふし
お前が強ければ強いやうに
やはり普通に打てばいいと思ふ
勝つのもいい
負けるのも又　いい
勝っても威張れないし
負けても威張れないものなのだ
いいか
わかつたか

上の詩は、おそらく父親が、自分の子供に説教をしている場面であろう。子供は「石をもつ」て喧嘩をしているのだ。またあるときには、「お父さんがいるんだぞ」と虚勢を張ったりしている。しかし、そんな息子を、父親は、突き放し、教え諭すのだ。「人は少しでも自分と違う力をかりてはいけない」と。「本当は（自分は）お前のそばにいないのだ」と。卑怯であってはならない、自分をごまかしてはならないのだと。だから「お前」は、自分自身の力だけで闘わなければならない。「お前」が相手より強かろうが弱かろうが、自分の全力をかけて、自分の力だけで闘わなければならないのだ。その結果が、勝とうが負けようが、自分がいま持っている自分の力が自分であって、それ以上でも以下でもないのだ。正しく自分が自分に向き合うこと。そして弱ければ、そこから力をつけていくために学ばなければならないし、鍛えていかなければならないのだということ。それが人が自立していくということであり、正しく大人に向かう唯一の道であることを、この父親は諭している。それが人としての正しい生き様であることを説いているのだ。こんなにも厳しい、そしてだからこそこんなにも優しい父親のことばを、父を幼いうちに亡くした私は、直には知らない。

ウミガメは、卵を産み落とすとき涙を流すと云う。それは人間の涙とは異なる生理現象だが、それでもそれが「涙」と観えるところに私たちの心象はある。

親が子どもを手放すとき、ことばには出来ない「哀しみ」がある。しかし子どもが、四肢をバタつかせながらも、大海の荒波を、ある目的地を目指して自分で泳ぎ渡る力をつけて欲しいと願う。それが、一人の人間として自立して生きるということだからだ。人は、自分の人生に於いて、何回かは、本気で、自分の力だけで闘わなければならないことがある。そのために力をつけなければならない。他者とではない。自分自身と闘うために、である。そして大切な誰かを守るために、である。西彼杵高校を卒業していく君たちが、自立した大人になって、また、この美しい海辺に戻ってきてくれることを願う。